様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ０５８１７・１９Ｋ２１００９

研究課題名（和文）社交不安症に対する注意に特化した治療プログラムの開発：自己注目の本質的役割の解明

研究課題名（英文）Development of an attention-focused treatment program for social anxiety disorder: Elucidation of the essential role of self-focused attention.

研究代表者
富田　望（Tomita, Nozomi）

早稲田大学・人間科学学術院・講師（任期付）

研究者番号：３０８２３３６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：社交不安（対人場面での不安緊張）の維持要因である自己注目（自分自身への過度な注意）に焦点をあてた介入研究や調査・実験研究を実施した。第一に、注意への介入法である注意訓練法（ATT）について、社交不安特有の自己注目に特化したATTを開発して効果を検証した結果、通常のATTを行う群よりも社交状況への恐怖感が有意に低下した。第二に、自己注目と関わりの深いメタ認知的信念（「自分自身を気にすることは役立つ」といった注意の方略）」に着目し、メタ認知的信念への介入プロトコルを開発して効果を検証した結果、自己注目の心理教育を行う群よりも、メタ認知的信念介入群において社交不安症状が有意に低減した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果によって、自己注目への効果的な介入法が示唆され、特に注意に関するメタ認知的信念を修正することで社交不安症状が大きく改善することが示された点で学術的・社会的意義があると考えている。また、縦断調査の実施に加えて、生態学的経時的評価法（EMA)によって社交不安症状と自己注目の関係性を日常生活の文脈から具体的に示すことができた点も、自己注目の本質的理解を深める上で学術的意義があると考えている。

研究成果の概要（英文）：We conducted intervention studies, surveys, and experimental studies focusing on self-focused attention, which is a factor that maintains social anxiety.
In the first study, we created an attention training technique (ATT), with sound stimuli that induced self-focused attention (SFA), and compared the effects with standard ATT. Although the fear of social situations decreased in both groups, the diminution level in the SFA-ATT group was larger than that of the standard ATT group.
In the second study, we investigated the effects of the intervention on the metacognitive beliefs about focused attention toward social anxiety. The result showed that positive and negative metacognitive beliefs were significantly reduced, which had clear effects on social anxiety.

研究分野：臨床心理学

キーワード：社交不安症　自己注目　注意バイアス　メタ認知療法　注意訓練法　メタ認知的信念

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

社交不安症（Social anxiety disorder: SAD）は、対人場面での緊張によって社会生活に深刻な障害を及ぼす疾患である。生涯有病率は 10.7%と不安症の中で最も高い（Kessler et al.,2005）一方で、自然寛解率が 15%と低く、本邦での推定労働損失額は年間一兆円を超える(亀井, 2009)。SAD の治療には認知行動療法が広く用いられているが、苦手場面での練習を行うエクスポージャー治療のみでは改善せず、ドロップアウトの多さなど未だに不十分な点も報告されている（Swift & Greenberg,2014)。

SAD には、維持要因を表す代表的なモデルが２つあり、共通して“注意の偏り”の問題を指摘している。しかしながら、一方は自分の否定的な思考や身体感覚に注目しすぎる「自己注目」を、もう一方は脅威的な他者に注目しすぎる「注意バイアス」を指摘しており、両モデルに対する統一的理解はなされていなかった。研究代表者は、この２つが別個に研究されてきたことが治療の非効率性につながっていると考え、脳活動と視線追尾の同時計測法によって社会的場面における自己注目と注意バイアスの関係性を検討し、社交不安の中核的な注意の問題は自己注目であることを解明した。特に、自己注目に伴い脳の右前頭極が過剰に活動し、注意バイアスが副次的に表れるという注意のプロセスを初めて捉えた。

注意に対する介入は、薬を使わずに脳機能に近い面に直接的に介入できる点、パーソナルな問題に踏み込むことなく症状が改善する点で、自己注目が病態維持に大きく関わり、治療関係を含め対人関係に困難を持つ SAD 特有の治療の難しさを打破することが期待できる。そこで、上記の知見を踏まえて、これまでの標準的なプログラムに含まれるビデオフィードバックなどの技法についても自己注目への介入要素を際立たせる形で実施し、さらに近年発展している神経心理学的介入やメタ認知への介入を併用することで、治療効果を向上できる可能性がある。

以上を集約して、「自己注目を中心とする注意の問題に焦点化した治療プログラムは、SAD 患者にとって大きな効果を有する介入法となり、SAD の本質的理解を深めるか」ということを学術的問いとする。

２．研究の目的

注意に焦点化した社交不安の治療プログラムを開発し、社会的場面における自己注目と注意バイアスの変化、社交不安症状の変化をもってその効果を検証することを目的とする。

３．研究の方法

（１）自己注目に対する介入法として提案されている注意訓練法（Attention Training Technique: ATT）について、社交不安症特有の自己注目に合わせた ATT のプロトコルを開発し、その効果を検証した。社交不安傾向を有する大学生 30 名を自己注目 ATT 群と通常 ATT 群に振り分け、いずれの群においても２週間の介入を行った。実験参加者には、介入の前後において、社交不安に関する質問紙への回答とスピーチ課題の実施を求め、日常生活における社交不安症状や能動的注意制御機能の変化、スピーチ中における自己注目や注意バイアスの変化、翌日の反芻(PEP）の変化を測定した。また、スピーチ中における自己注目の客観的指標として、光トポグラフィーを用いて右前頭極の活動を測定した。

（２）注意の偏りを制御するメタ認知的信念（「自分自身を気にすることは役立つ」といった注意の方略)」に着目し、メタ認知的信念を低減させることで注意の偏りが修正され、社交不安症状が低減するのかを検討した。社交不安傾向を有する大学生 22 名を介入群と統制群に振り分けた。介入群には、スピーチ課題中の視線データを用いながら、注意の偏りとメタ認知的信念に関する心理教育を実施し、統制群には注意の偏りに関する簡易的な心理教育のみ実施した。効果指標としては、社交不安症状を測定する質問紙と、注意の偏りを測定する認知課題およびスピーチ課題時における視線の停留時間を用いた。

（３）自己注目、注意バイアス、注意制御機能の低下、注意の向け方に関するメタ認知的信念を測定する縦断調査を実施し、各概念がどのような因果関係にあり、結果として社交不安症状の低下を引き起こすのかを検討した。約 800 名を対象としたオンライン調査を実施し、３ヶ月ごとに調査を３回実施した。

（４）自己注目を誘発する環境側の刺激を明らかにするために、生態学的経時的評価法(Ecological Momentary Assessment: EMA; Shiffman, Stone, & Hufford, 2008）を用いて、日常生活の社交場面で知覚される様々な刺激と自己注目との関連性を検討した。社交不安傾向を有する大学生と大学院生 22 名を対象として、Web アンケートによる EMA 調査を 10 日間実施した。具体的には、アンケートの URL が記載された E メールを１日３回参加者に送信し、回答時から過去５時間以内に経験した社交場面、社交場面で知覚した９個の刺激、自己注目の程度について回答を求めた。

４．研究成果

（１）介入研究の結果、両群で社交場面への恐れは低減したが、自己注目 ATT 群で減少量が大きいことが示された。観察者視点による自己注目は両群ともに減少したが、PEP は自己注目 ATT 群にのみ減少が見られた。一方、スピーチ中における自己注目の指標としていた右前頭極の脳活動については、両群ともに介入前後で有意な変化は示されなかった。以上より、社交不安症特有の自己注目に焦点を当てた ATT では、SAD 症状や PEP に対する効果が大きいことが示唆されたが、その作用機序の違いに関してはさらなる検討が必要と考えられた。

（２）介入研究の結果、介入群のみにおいて社交不安症状が有意に低減し、メタ認知的信念と社交不安症状の変化量同士の間には有意な正の相関が示された。一方で、介入前後における認知課題の成績およびスピーチ課題中の各聴衆への注視時間については有意差がなく、注意の偏り自体は介入前後において統計的変化を示さなかった。以上より、メタ認知的信念への介入は、注意の偏り自体への直接的な効果はないものの、社交不安症状を低減する上で有用である可能性が示唆された。注意の向け方に関するメタ認知的信念を操作した実験研究や社交不安症状への低減効果を示した知見は国内外において存在しないため、SAD の病態理解および SAD に対する効果的な治療法の開発という点において学術的・社会的意義のある知見と考えられる。

（３）３時点のデータを用いた媒介分析を実施した結果、自己注目へのネガティブなメタ認知的信念は自己注目(観察者視点、身体への注目)を媒介して半年後の他者評価懸念に影響を及ぼすが、直接的にも影響を及ぼしていることが示された。また、自己注目は、自己注目へのネガティブなメタ認知的信念と社交状況への回避の間を媒介しないことが示された。

注意バイアスへのネガティブなメタ認知的信念は注意バイアスを媒介して半年後の他者評価懸念や社交不安症状に影響を及ぼすが、直接的にも影響を及ぼしていることが示された。また、注意バイアスは、注意バイアスへのネガティブなメタ認知的信念を媒介して半年後の他者評価懸念や社交不安症状に影響を及ぼすことが示唆された。

本研究により、自己注目や注意バイアスという問題が長期的な視点で社交不安症状にどのような影響を及ぼすのかを検討することができた。今後は、発達障害の傾向、社会的状況への接触頻度といった他の要因を統制することや、交差遅延モデルなどを用いながらさらなる検討を進める予定である。

（４）調査の結果、分析対象となる 321 回分の回答が得られた。各刺激を独立変数、自己注目を従属変数としたマルチレベル重回帰分析等を行った結果、「他者からの視線」、「他者からの評価」、「権威のある人」が知覚されると身体感覚への自己注目が生じやすく、上記に加えて「知り合いの人」が知覚されると観察者視点による自己注目が生じやすいことが示された。特に視線については、視線への恐怖度に関わらず、２種類の自己注目を高めることが示された。

従来の研究において、自己注目は、実験場面を設定して測定されることや特性的な状態を測定する質問紙などで測定されることが一般的であったが、本研究により、社交不安症状と自己注目の関係性、自己注目を引き起こす刺激を日常生活の文脈から具体的に示すことができた。自己注目の新たな測定方法を提案できた点や、自己注目の理解を深める知見が得られた点で学術的意義があると考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　15件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　12件）

１．著者名 Tomita, N., & Kumano, H.	４．巻 Epub ahead of print
２．論文標題 Self-focused attention related to social anxiety during free speaking tasks activates the right frontopolar area	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Current Psychology	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-021-02319-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 富田 望、甲斐 圭太郎、南出 歩美、熊野 宏昭	４．巻 47
２．論文標題 自己注目誘発音を用いた注意訓練法の作成と社交不安傾向者に対する効果の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 認知行動療法研究	６．最初と最後の頁 261～272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24468/jjbct.20-037	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 武井 友紀、藤島 雄磨、富田 望、南出 歩美、梅津 千佳、熊野 宏昭	４．巻 26
２．論文標題 ディタッチト・マインドフルネスに関するメタ認知的知識尺度の作成および信頼性と妥当性の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 行動医学研究	６．最初と最後の頁 96～105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11331/jjbm.26.96	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 藤島 雄磨、梅田 亜友美、池田 寛人、高橋 恵理子、富田 望、熊野 宏昭	４．巻 26
２．論文標題 不適応的な対処行動に関するメタ認知的信念と能動的注意制御機能およびディタッチト・ マインドフルネスとの関連性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 行動医学研究	６．最初と最後の頁 16～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11331/jjbm.26.16	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Usui, K., Kawashima, I., Tomita, N., Takahashi, T., & Kumano, H.	4．巻 125
2．論文標題 Effects of the Attention Training Technique on Brain Activity in Healthy University Students Assessed by EEG Source Imaging	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Psychological Reports	6．最初と最後の頁 862～881
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0033294120988100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南出 歩美、富田 望、亀谷 知麻記、武井 友紀、梅津 千佳、熊野 宏昭	4．巻 48
2．論文標題 社交不安症状と表情への注意バイアス、および注意の向け方に関するメタ認知的信念の関連性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 認知行動療法研究	6．最初と最後の頁 47～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24468/jjbct.20-038	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 片山 広大、富田 望、二瓶 穂香、髙橋 徹、栗原 勇人、芝田 純也、美馬 達哉、大須 理英子、熊野 宏昭	4．巻 21
2．論文標題 経頭蓋静磁場刺激が自己注目状態時の前頭前野に与える影響の予備的検討	5．発行年 2021年
3．雑誌名 早稲田大学臨床心理学研究	6．最初と最後の頁 35～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 朴木 優斗、管 思清、小口 真奈、髙橋 徹、仁田 雄介、富田 望、熊野 宏昭	4．巻 33
2．論文標題 事象関連電位P300を用いた能動的注意制御機能の測定法	5．発行年 2021年
3．雑誌名 人間科学研究	6．最初と最後の頁 279-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南出 歩美、甲斐 圭太郎、富田 望、熊谷 真人、熊野 宏昭	4．巻 20
2．論文標題 社交不安と怒り顔に対する接近的注意バイアス、および注意の向け方に関するメタ認知的信念の関連性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 早稲田大学臨床心理学研究	6．最初と最後の頁 5-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富田 望、南出 歩美、熊野 宏昭	4．巻 25
2．論文標題 高社交不安者における注意の向け方に関する メタ認知的信念尺度の開発	5．発行年 2020年
3．雑誌名 行動医学研究	6．最初と最後の頁 3～13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11331/jjbm.25.3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tomita, N., Minamide, A., & Kumano, H.	4．巻 44
2．論文標題 Neural correlates supported by eye movements of self-focused attention and other-focused attention in social situations.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Cognitive Therapy and Research	6．最初と最後の頁 511～525
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10608-019-10075-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tomita, N., Minamide, A., & Kumano, H.	4．巻 －
2．論文標題 Does visual scanpath reflect self-focused and other-focused attention, a maintenance factor of social anxiety?	5．発行年 2019年
3．雑誌名 SageSubmissions	6．最初と最後の頁 1～8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31124/advance.9873050	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tomita, N., Imai, S., Kanayama, Y., & Kumano, H.	4．巻 126
2．論文標題 Relationships Between Cortically Mediated Attentional Dysfunction and Social Anxiety, Self-Focused Attention, and External Attention Bias	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Perceptual and Motor Skills	6．最初と最後の頁 1101～1116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0031512519867798	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武井 友紀、南出 歩美、富田 望、梅津 千佳、熊野 宏昭	4．巻 19
2．論文標題 ディタッチト・マインドフルネスの心理的要素を測定する尺度の作成および信頼性・妥当性の検討	5．発行年 2019年
3．雑誌名 早稲田大学臨床心理学研究	6．最初と最後の頁 45～52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 南出 歩美、平 結衣、新川 瑶子、佐々木 瞳、長澤 さやか、谷沢 典子、熊谷 真人、富田 望、熊野 宏昭	4．巻 18
2．論文標題 注意の偏りが社交不安傾向に及ぼす影響	5．発行年 2018年
3．雑誌名 早稲田大学臨床心理学研究	6．最初と最後の頁 45～50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 荒木 美乃里、富田 望、熊野 宏昭	4．巻 24
2．論文標題 入眠時注意制御尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　-大学生を対象とした検討-	5．発行年 2018年
3．雑誌名 行動医学研究	6．最初と最後の頁 2～11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11331/jjbm.24.2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　1件／うち国際学会　9件）

１．発表者名 富田 望
２．発表標題 CTワークショップ12 メタ認知療法：社交不安に特化した注意訓練法の開発と評価
３．学会等名 第18回日本うつ病学会総会／第21回日本認知療法・認知行動療法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tomita, N., Minamide, A., & Kumano, H.
２．発表標題 Does autism tendency change the effect of field and observer perspective in social settings on clinical symptoms?
３．学会等名 The 7th Asian Cognitive Behaviour Therapy (Asian CBT) Conference 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tomita, N., Minamide, A., & Kumano, H.
２．発表標題 Relation between parameters of eye-movements and self/other-focused attention in social situations
３．学会等名 The 32nd International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 富田 望、熊野 宏昭
２．発表標題 高社交不安者における自己注目と注意バイアスは脳活動と視線にどのように現れるか
３．学会等名 第13回日本不安症学会学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 南出 歩美、富田 望、武井 友紀、梅津 千佳、熊野 宏昭
２．発表標題 注意の向け方に関するメタ認知的信念が心的視点に及ぼす影響～社交不安傾向者を対象とした予備的検討～
３．学会等名 日本行動医学会第27回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 富田 望、熊野 宏昭
２．発表標題 スピーチ中における視覚的注意と視点取得の様相は、翌日のネガティブな反芻を予測するか？――視線追尾を用いた検討――
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 南出 歩美、富田 望、武井 友紀、亀谷 知麻記、熊野 宏昭
２．発表標題 社交不安と表情に対する注意バイアス、および注意の向け方に関するメタ認知的信念の関連性
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 富田 望
２．発表標題 眼球運動および脳機能に基づく自己注目のアセスメントと介入法への展開 自主企画シンポジウム：認知神経科学に基づく新たな介入法を探る
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 南出 歩美、富田 望、武井 友紀、梅津 千佳、亀谷 知麻記、熊野 宏昭
２．発表標題 注意の向け方に関するメタ認知的信念が注意の偏りと社交不安症状に及ぼす影響―社交不安傾向者を対象とした予備的検討―
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Tomita, N., Minamide, A., & Kumano, H.
２．発表標題 Relation between parameters of eye-movements and self/other-focused attention in social situations.
３．学会等名 The 32nd International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Minamide, A., Tomita, N., Kai, K., Kumagai, M., & Kumano, H.
２．発表標題 Correlation among social anxiety, attentional biases toward angry faces, and metacognitive beliefs about focused attention.
３．学会等名 The 32nd International Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Inoue, K., Tomita, N., & Kumano, H.
２．発表標題 Does the improvement of the unworkable change agendas measured by IRAP predict the change in acceptance behavior after the acceptance intervention?
３．学会等名 ACBS World conference 18（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 武井 友紀、南出 歩美、富田 望、熊野 宏昭
２．発表標題 ディタッチト・マインドフルネスに対するメタ認知的知識尺度の作成および信頼性・妥当性の検討
３．学会等名 第26回日本行動医学会学術総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 朴木 優斗、富田 望、仁田 雄介、高橋 徹、管 思清、熊野 宏昭
２．発表標題 分割的注意が不安症状に影響を及ぼす際の作用機序に関する選択的レビュー
３．学会等名 第26回日本行動医学会学術総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 富田 望、南出 歩美、熊野 宏昭
２．発表標題 社交不安における注意バイアスとメタ認知的信念の関連―社会的場面における視線追尾を用いて―
３．学会等名 第2回日本心身医学関連学会合同集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomita, N., Minamide, A., & Kumano, H.
２．発表標題 Does visual scanpath reflect self-focused and other-focused attention, a maintenance factor of social anxiety?
３．学会等名 The 11th International Health and Longevity Forum & Health Industry Expo and the Second Session of World Comprehensive Health Sports Meeting,（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Minamide, A., Tomita, N., Kai, K., Kumagai, M., & Kumano, H.
２．発表標題 The relation between social anxiety, attentional biases, and metacognitive beliefs.
３．学会等名 The 11th International Health and Longevity Forum & Health Industry Expo and the Second Session of World Comprehensive Health Sports Meeting,（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 武井 友紀、南出 歩美、富田 望、梅津 千佳、熊野 宏昭
２．発表標題 ディタッチト・マインドフルネスの心理的要素を測定する尺度の作成および信頼性・妥当性の検討
３．学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomita, N. & Kumano, H.
２．発表標題 Neural correlates of self-focused attention and external attention bias in social anxiety.
３．学会等名 9th World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomita, N. & Kumano, H.
２．発表標題 A unified understanding of self-focused attention and attention bias in social anxiety
３．学会等名 International Symposium on Clinical Neuroscience of Mindfulness（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 富田 望
２．発表標題 社交不安における自己注目と他者への注意バイアスの統一的理解にむけた方法論の提案
３．学会等名 第44回日本認知・行動療法学会　大会企画シンポジウム１　不安の認知神経科学的研究：認知行動療法の発展につなげる
４．発表年 2018年

１．発表者名 富田 望、熊野宏昭
２．発表標題 社交不安における自己注目と注意バイアスの統一的理解
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 自己注目誘発音を用いた注意訓練法の作成と効果の検討ー効果検討のパイロットスタディー
２．発表標題 甲斐 圭太郎、富田 望、木甲斐 智紀、谷沢 典子、熊野 宏昭
３．学会等名 第44回日本認知・行動療法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 メタ認知的信念と接近的注意バイアスの関連
２．発表標題 南出 歩美、甲斐 圭太郎、富田 望、熊谷 真人、熊野 宏昭
３．学会等名 第44回日本認知・行動療法学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関